

『学問』のコンセプト

——東西におけるその歴史と問題点——

中 田 佳 昭

1. はじめに

日本の今日の文化的現状について、『新学問論』において西部邁氏は次のように指摘している。

上位の価値とは、かつては宗教であり、芸術であり、そして学問であった。しかし「豊かさ」と「等しさ」の歯車が巡りに巡った挙句、宗教、芸術、そして学問は、それぞれかみ砕かれてしまったも同然のありさまになった。……人々の魂を魅了する芸術は消え失せた。そして学問もすでに人々の理想ではなくなってしまったのだ。⁽¹⁾

話を学問に限れば、西部氏が宗教、芸術、学問といった上位価値喪失の温床として指摘する「豊かで」、「等しい」社会を建設するため、戦後以来今日までその理念的バック・ボーンとなった「日本国憲法」第23条には次のようにも記されている。「学問の自由は、これを保証する。」一文の含むところは、人間にとって学問することは基本的人権のひとつであり、憲法はこれが侵害されることのないようその自由を保証する、というものである。この理念のもとに、人々は自由に学問することが個人の権利として認められていることをきわめて当然なことと受けとめ、今日保証され

たその自由によって果たされる学問的成果の総体は、それが規制され不自由であった時代のそれとは比較すべくもないことは、誰の目にも自明なことのようにも思われる。

しかしもう一度西部氏の引用に立ち返れば、一方には「豊かさ」と「等しさ」に染めあげられた高度大衆社会の中で、相対主義の風にさらされ、学問の世界が価値と方向の喪失に向かっているのではないか、という氏の危惧をゆえなしとない現実が存在することも認めなければならない。確かに横溢する物質文明、大衆消費社会の中であって、とすれば学問の理想は見失われ、真の学問的気概は衰弱の途上にあるようにも見うけられる。とすれば、ありあまる自由もまた、それ自体の価値は評価されつつも、豊かさや等しさ同様に、無条件に学問の発展を保証するものではないことを再認識しておかなければならない。

たしかに歴史を振り返れば、「学問」がその外的自由を保証された、豊かで、等しい時代のみの特権でないこともまた明白な事実である。おそらく人間の学問への情熱は、その外的条件の不遇時代、最も厳しく自由を制限された困難な状況においてすら、頑強不屈に生き延びてきたひとつの情念ともいえる。その意味で、自由と不自由とを問わず、「学問」は人間にとってきわめて本質的営為であり、人類の文化の発展は人間と他生物とを分かちこの営みによって支えられてもきたのである。

人間にとって「学問」とは何か。広辞苑によれば、それは単に「学び習うこと。学芸を修めること」と説明されている。「学問」という言葉の内包するところは、広く一般に自明のものとして了解されているので、辞書の定義とすればこの程度が適切というところであろう。しかし西部氏が方向喪失にあると指摘する「学問」について、その意味と本質とをさらに深く問いなおすとすれば、問題はそう単純とはいえない。そもそも、人は何のために、何を学ぶのか。本論の目的は、言葉の歴史に即して「学問」のコンセプトを追い、東西におけるその考え方、相違、そして問題点等を明らかにしようとするものである。

2. 「学問」に関わる西欧諸語の語源 —learn, study, know

和英辞典等によれば、行為としての「学問」に相当する一般的英語として learning, study といったことが挙げられている。また学んで得られる成果の意味での「学問」に近い言葉としては scholarship が、「知識」に対する英語としては knowledge がある。

まず learning について、この語の動詞 learn は「学ぶ；習得する」を意味するゲルマン系のことばである。learn は古英語(OE)では ^{レオルニア}leornian で、「教える」を意味する ^{レーラン}læran に対置されることばであった。leornian と ^{レーラン}læran はもとをただせば同族語で、ドイツ語の ^{レルネン}lernen 「学ぶ」と、^{レーレン}lehren 「教える」とに対比される。相対的な意味を持つこれらのことばは不思議なことにその語源を遡れば、いづれも古高地ドイツ語(OHG)の ^{ライス}leis(a)「車の轍」に辿りつく。おそらく「学問」とは leis(a) の原義にしたがって「轍、跡、道をたどる」

ことだと考えられていたものと推測される。

「学ぶ」と「教える」が同じ語源に由来するという興味深い事実からは、「教えることも、学ぶことも同じ学問の道」だとする当時の人々の学ぶことに対する深い認識を垣間見ることができる。ちなみに、こうした事情から learn には19世紀初頭まで「学ぶ」のほかに「教える」の意味が付随していた。今日ではこうした用法は俗語、方言となっているが、例えばシェイクスピアには次のような使用法がみられる。“Sweet Prince, you learn me noble thankfulness.”(「御領主には、まことに立派な返礼のしかたを教えてくださいました。」)[『空騒ぎ』第4幕1場]

learn にたいして「勉強(する)；研究(する)；書斎」などの意味に使用される study は、ラテン系のことばとされる。フランス語の「勉強；研究；練習(時に練習曲、習作)」を意味する名詞は ^{エチユード}étude、動詞は ^{エチユディエ}étudier であるが、これらの語はいずれもラテン語の ^{ストゥディウム}studium 「熱意；熱中；熱心」(=eagerness, zeal) に由来する。ここから「熱心に学ぶ人」の意の英語 student、フランス語の ^{エトゥディアン}étudiant、またイタリア語の「学ぶ」^{ストゥディアレ}studiare を経由して「仕事場；撮影所」studio といったことが派生することとなった。

また学問は知ること(=know)、知識(=knowledge)に関係する。know は Indo-European 語源の語幹 gno, gene「知る」(サンスクリットでは ^{イナ}jna) に由来すると考えられている。ゲルマン系のことばにおいては、g は k(c)に音韻変化し、ここから「知る」を意味するドイツ語の ^{ケンネン}kennen、英語の know といったことが派生することとなった。know は古英語においては ^{クナーワン}cnawan (k=c) で、同じ古英語の ^{クンナン}can を意味する ^{クンナン}cunnan に類似し、

したがって know と can とは同族語ということになる。“I know how to ski.” は “I can ski.” の意味であり、「知っている」ことが能力を表す「できる」の意味に転意したのである。また今日「ずるい；巧みな」の意味で使われる cunning も cnawan, cunnan に関係し know, can の同根語である。cunning も「知っている」から「よく知っていて、ずるい」の意味を持つにいたったものと推測される。一方 gno, gene は別のルート、ギリシア語、ラテン語を経由して「知る；知識」に関するいくつかの英語の誕生に関わった。recognition (= again + know) 「認識；認知」、ignorance (= not + know) 「無知；無学」、diagnosis (= apart + know) 「診断；診察」、agnostic (= not + know) 「不可知論者」といった英語はみな gno, gene に由来することばである。

以上 learn, study, know といった「学問」に関わることばの語源を見てきたが、これらは「学習；勉強」といった比較的軽いニュアンスで使用されることが多く、必ずしもこれらのことばが十全に「学問」の意味を含んでいるとはいえない。ドイツ語には比較的「学問」に近い意味を表すことばとして Wissen-^{ウィッセン}schaft がある。Wissenschaft は「科学」という意味で使用されることもあるが、ある意味では科学を含む一般的な意味での「学；学問」としての19世紀以前の science に近く、つけ加えれば「体系化された知識と学問」といったニュアンスが強い。ドイツ語の動詞 wissen は「知る」、また名詞 Wissen は「個別の知識」の意味であるが、Wissenschaft はその総合化された知識と体系的学問の意味である。この他に、古代ギリシア以来西欧において長い間「学問」に近い概念を表していた主要なことばは ^{フィロソフィア}philosophia (= philosophy) であり、また

ある時期「学問」の意味を担ったのはラテン語の ^{スキエンティア}scientia (= science) であった。philosophia についても、scientia についても、その影響は西欧の学問的伝統のなかに今日に至るまで長くその影を引いている。「学問」に関わるこうした西欧諸語の歴史を明らかにすることは、また「学問」の歴史をたどることにもなる。

3. 学問の誕生

1) 学問としての philosophia

古代ギリシアにおける「学問」は philosophia ということばのもとに集約される。今日英語の philosophy は「哲学」と訳されているが、当時 philosophia はその語源 philo (= 愛)、sophia (= 智) からもうかがえるごとく「智を愛し、求める」というところから、智の探究をとうして真理の把握を志向する「学問」を意味する概念であった。古代ギリシアの学者たちは、古くから「世界はどのようにあるか」、「人はその世界においていかに生きるべきか」、また「世界と人間とを支える究極的存在とは何か」といった問題に強い関心を示し、人はまず人間とそれを取りまく客観的世界についての確かな知識をもつべきだとして、広く一般に学問を奨励した。

ソクラテスは人間の幸福を究極的目標として位置付け、真の意味において「よきもの」とは人間を幸福に導く本当の意味での智慧 (= sophia) であるとして、人間は学問によりこの智慧に至るべく努めなければならない、と主張した。アポロンの神殿に掲げられた「汝自身を知れ」という神託に従い、ソクラテスは「自分は知らないことを知っている」という「無知の知」を自らの出発点として、学問

することの重要性を説き、ギリシアにおける学問的伝統の先駆けとなった。

プラトンにおいてソクラテスの「よきもの」は、永遠不変の「善のアイデア」に結びつけられた。プラトンは、この世のすべての存在は、それを超えて先験的に存在する永遠、普遍の真理であるアイデアの模倣にすぎないとして、学問の究極的目標は、その「善のアイデア」の認識にあると主張した。しかしこれによってプラトンは、必ずしも形而下的知識を排除したわけではない。彼はまた数学、天文学といった自然科学的知識をも人間にとって不可欠なものとして、これを普遍的教養に含んだ大きな学問のシステムを構想し、古代ギリシアにおける学問の発展に大きな足跡を印している。

ギリシアにおいて学問を総合・体系化したのはアリストテレスである。かれは『形而上学』冒頭において「すべての人間は、生まれつき、知ることを欲する」⁽²⁾と記したように、「知るために知る」という、純粹の知を求める人間固有のこの欲求に従って、人間、社会、自然におよぶ広範な領域を考察の対象とし、知識の主要な領域を論理学、形而上学、自然学、天文学、生物学、弁論術や政治学を含む倫理学、芸術に関する詩学、等に分類して体系化し、その後の学問のあり方に大きな影響を及ぼした。アリストテレスの学問的位置は、絶対知、存在を存在たらしめている神的な第一原因を想定しているという点において、ソクラテス、プラトンを発展的に継承した形而上学的立場にあるが、一方もろもろの存在の個々の事象を実証的に考察、学問的領域を分類、体系化したという点において、西欧の合理的・科学的学問の基礎を敷いたといえることができる。

2) mathēma, logos, epistēmē

ギリシア語には「学問」を意味する *philosophia* とは別に、これと比較的近い意味で使用されていた *mathēsis* ^{マテシス} という言葉がある。*mathesis* は *learn* ^{マンタネイン} を意味するギリシア語の動詞 *manthanein* の名詞形で「学ぶ動作」を意味し、また「学ばれるもの」という意味では同じ名詞形の *mathēma* ^{マテマ} という言葉が使用されていた。言葉の原義から *mathema* は初めは単に「学」を意味する用語であったが、やがて *mathēmatika* ^{マテマティカ} として特に「数学」を意味する言葉となった。プラトンは『国家』の中で「20才代は数学を学んで、30才代で哲学を学ぶ準備をしなければならない」といった趣旨のことをのべているが、古代ギリシアにあっては数学が比較的早期に学ぶべき規範を整え、代表的学問としての位置を確立していたからだと考えられている。

ついでながら「学」に関しては、もうひとつ英語の *-logy* がある。*bio·logy* (生物学)、*psycho·logy* (心理学)、*socio·logy* (社会学) 等、その他多くの学・学問を意味する英語に使われている *-logy* は、ギリシア語の *logos* ^{ロゴス} に由来している。*logos* は言葉、思想、理性、法則、測定、尺度などを意味する、ギリシア語の中で最も多義的な語のひとつであるが、その原意は動詞 *legein* ^{レグイン} によっている。*legein* は本来「集める、数える、選ぶ」といった意味であったが、それが事物や経験を集め、数え、一定の秩序をもって整理し、言葉で説明する、といったところから、整備確立された学問体系としての「学」= *-logy* に結びつけられることになったものと考えられる。

ギリシア時代の学問に関連して、あげておかなければならないもうひとつの言葉に *epistēmē* ^{エピステーメー} がある。*epistēmē* は一部 *sophia* に

重なる部分もあるが、むしろ「知識」に相当するといっている。学問に関して「知識とは何か」という問いは、古くからギリシア人の関心を集めてきた問題であるが、特にプラトン、アリストテレス等は、人間の営みを思惟にもとづく誤りのない知識(=epistēmē)と、感覚にもとづく不確実な憶測(=doxa)とに分け、学問とは前者 epistēmē によって真理に近づくことだとした。epistēmē は、プラトンにおいては「イデア」認識の手段として強調され、アリストテレスにおいては、絶対知に至るための形而上、形而下を含む広範な知識として重視された。その形から明らかなように、epistēmē は「認識論」を意味する英語 epistemology の語源であるが、これはギリシアの学問的傾向が強く認識論的知識にもとづくものであったことの結果だと考えられる。

3) school と academia

すでに見たように「学問」をあらわす英語のひとつに scholarship という言葉がある。scholarship には「奨学金」という意味もあるが、本来は scholar(=学者)に性質・技術・状態などをあらわす名詞語尾 -ship をつけて、学ぶことによって得られた「学問；学識」などを意味する言葉であった。この scholarship は学校(=school)をあらわすラテン語の schola をさかのぼって、ギリシア語の scholē に由来する。興味深いことにこの scholē は古代ギリシア人にとって学校、学問といった意味ではなく、単に「余暇；暇」(=leisure)をあらわす言葉であった。プラトン、アリストテレスといった哲学者たちは、一日の早い時刻に時間のある若者を集めて授業を行ない、このクラスを scholē と呼んだ。この scholē から school の原型が誕生したのだが、余暇、

ゆとりから学校、学問が生れたというのは、今日の学問・教育のあり方を考える上で十分示唆的である。「学問的；学究的」(時に「机上の空論の」)を意味する英語 academic は、プラトンの創設したこの学校 scholē に由来する。プラトンは紀元前387年48才の頃、アテネ郊外の ^{アカデーモス}Acadēmūs の森に ^{アカデーメイア}Acadēmīa を開設、若者を集めて教育を行なった。アリストテレスも約20年間学んだといわれるこのプラトンのアカデミアは、教育と学問研究とを始めて組織的におこなった、今日の大学の原型をなすものとして画期的意味を持っている。アカデミアは、529年東ローマ帝国皇帝ユスティニアヌスが宗教上の理由から、「大学は異端邪説の温床である」として発した勅令により閉鎖されるまでの間、約1千年の長きに渡って歴史の風雪に耐え、西欧の学問の伝統を育んだ。師ソクラテス、プラトン、アリストテレス等の学問に及ぼした影響がいかに甚大であったかが想像される。

4. 中世における学問

1) 知識としての Scientia

中世において新たに学問の領域につけ加えられたのは、^{スキエンティア}scientia(=science)ということばであった。ラテン語において philosophia は、たとえば有名なニュートンの『プリンキピア』(1687)の原題 *Philosophiae Naturalis Principia Mathematica* (『自然哲学の数学的原理』)に見られるように、広く「学問」を意味することばとして使用されていたが、scientia の原意はむしろ「知識」であった。その意味で scientia、science は今日言う「科学」ではなく、ギリシャ語の epistēmē に相当する概念であり、中世から近世に至るまで、事

物や事実についての個別的知識のみならず、体系化された学問的知識の総体を意味する言葉として広く一般に使用されてきた。今日でも学問の領域を natural science(自然科学)だけでなく、cultural science(人文科学)、social science(社会科学)などに分類するが、こうした場合の science は「知識・学」の意味で使用された例ということができる。

scientia、science の「知識・学」としての意味は、ラテン語の動詞 ^{スキニオ}scio, ^{スキニレ}scire に由来する。これらの語の語幹 sci- は「知る」(=know)の意味で、たとえば英語の con・scious(意識している；自覚のある)、con・science(良心)、pre・sci・ence(予知；先見)といった言葉の中にその姿を認めることができる。science が英語として一般に使用されるようになったのは14世紀頃からとされ、その意味は比較的長い間「知識・学」であった。たとえばシェイクスピアは『終りよければすべてよし』(1603～1604頃)の中で、次のように使用している。“Plutus himself …… hath not in nature’s mystery more science than I have in the ring.”(財宝の神プルートスといえども、わたしがこの指輪にたいして持っている以上の知識を、自然の神秘について持つてはいない。) science から「科学」の意味が明確に分離してくるのは、18～19世紀に至ってからのことである。scientist「科学者」はイギリスの哲学者 W. Whewell による1840年の造語とされている。

2) disciplina と doctorina

前出のギリシャ語 mathēma に相当するラテン語に ^{ディスキプリナ}disciplīna がある。disciplīna は「学ぶ」という意味のラテン語の動詞 ^{ディスケレ}discere (disco) に由来する名詞で「学ぶこと；学ばれ

るもの」といった意味で使用された。disciplīna に相当する英語は discipline であるが、こちらの方は原意からくる「学科；学問の部分、分野」の他に、今日では一般的に「訓練；鍛錬；規律」の意味で使用されることが多い。もうひとつ disciplina に関係する英語として disciple がある。disciple は「キリストの使徒」の他に「弟子；門弟」、つまり「教えをうけ、学ぶ者」の意味で使用される言葉である。

discipline にはラテン語の ^{ドクトリナ}doctorīna が対置されている。この語は「教える」という意味のラテン語の動詞 ^{ドケレ}docere (doceo) に由来し、「教えること；教えられたもの」の意味をあらわしている。「学んで完成の域に達し、教える立場に立つことのできる人」を意味する doctor はここに由来する。英語において doctor が「教師；博士；医者」といった意味で使用され、学問一般、特に文系の学問において与えられる「博士」の称号 Ph.D. が Doctor of Philosophy (= Philosophiae Doctor) の略であるのは周知のことである。

3) 神に奉仕する学問

総体としてヨーロッパ中世の学問を支配したのは、神であった。この時代、神こそが絶対的真理であり、すべての相対的知識はこの絶対者との関係によってのみ真実を保証される、というキリスト教的世界観のもとにあって、学問は神に奉仕するものと考えられた。ヨーロッパ中世は、4～5世紀のローマ帝国の崩壊から15世紀のルネッサンスに至る間約千年に及ぶが、神に仕える学問という色彩のもとに12世紀を境としてふたつに大別される。12世紀に至る6～7世紀の間支配的であったのは、この時代の代表的神学者アウグスティヌス(354～430)や哲学者ボエティウス

(480～525頃)の著作に見られるように、プラトニズム、ネオ・プラトニズムに色濃く影響された、神秘主義的、形而上学的傾向の強い学問であった。こうした学問的環境の中で重要視されたのは、人間・社会・自然についての客観的知識ではなく、むしろ人の内面的知識、内的な精神の経験であり、このための学問・教育の中心となったのは主として修道院であった。中世においては、^{アルテスリベラリス}Artis Liberalisの名のもとに7つの教養科目、初級3科(^{トリヴィウム}Trivium)一文法・論理学・修辞学と、上級4科(^{クアドリヴィウム}Quadrivium)―地理学・天文学・数学・音楽が決められていたが、こうした状況のもとで12世紀に至る間重要視されたのは、前者初級3科であった。

4) アリストテレスの影響とスコラ哲学

12世紀に至ってこうした学問的状况に大きな変化が生じた。都市の発達とともに、学問の中心は修道院から教会付属の大学や都市の学校へと移り、おりからアラビアからヨーロッパにもたらされた、イスラムと古代ギリシャの自然科学的色彩の強い学問・学術の遺産が、盛んにラテン語訳されるにおよんで、学問の世界に新たな風が吹き始めた。こうした状況の中でキリスト教神学が直面したのは、いかにしてアリストテレスに対処するかという問題であった。『形而上学』『自然学』その他に示されたアリストテレスの「存在を存在として科学する」という実証的学問の姿勢・方法論の与えた影響は大きく、アルベルトゥス・マグヌス(1200～1280頃)、トマス・アクィナス(1225～1274)といったスコラ哲学者等の課題は、いかにしてこれをキリスト教の神学に結び付けるかということであった。彼等は、神の啓示は反理性ではなく超理性であ

り、神の創造になる世界の事象についての客観的知識を求め真理を追求することもまた、キリスト教的世界観に矛盾せず神の道に叶うことである、としてアリストテレスを超克した。トマス・アクィナスはアリストテレスの理性による学問(*disciplīna*)と、神の啓示による教え(*doctorīna*)を区別して次のように述べている。「人間の理性によって探究される哲学的諸学問(*disciplīna*)とは別に、これを超えた神の啓示に基づく何らかの教え(*doctorīna*)が存在しなければならない。」(『神学大全』第一問題・第一項⁽³⁾)

こうして市民権を得た実証主義的、科学的学問の隆盛に伴って、学問の領域における一種の知の組み替えが進行した。12世紀以後初級3科におかれていた教養科目の比重は、大きく上級4科に移ることとなった。またたとえば、パリ大学においては、学科は論理学・文法・修辞学からなる「合理哲学」、倫理学・家政学・政治学・超自然神学からなる「道徳哲学」、形而上学・数学・自然学からなる「自然哲学」に再編成され、さらにこれにそれを専門とする者のために神学・医学・法学が加えられた。近世の学問はアリストテレスとスコラ哲学の融合によって始まり、ここにすでに16～17世紀における新しい学問の道が準備されつつあったと言っていい。

5. 近代的学問の誕生

1) 科学革命

16～17世紀に至って、ヨーロッパにおける近代的学問の扉が開かれた。封建社会の崩壊、ルネッサンス、都市の発達、市民の台頭と市民社会の形成といった歴史の流れの中で、近代的「知」の誕生が準備されつつあった。こ

の新たな学問の開花は「科学革命」の名で知られている。

この時代の学者たちの多くはなお信仰の立場に身を置きながらも、学問を形而上学的、宗教的くびきから切り離し、世界の事象を客観的、合理的、実証的、経験的、帰納的、計量的に研究することを主張した。こうした中でとりわけ数学の学問への適用の意義は、強調されなければならない。近代科学の父と言われるイタリアの物理学者ガリレイは、次のような主旨のことを述べている。「科学の対象は神が自然の書物のうちに啓示した物象であるが、この書物は数学的記号で書かれている。⁽⁴⁾」

こうした姿勢に基づく学問・研究によって、世界の神秘、宇宙の法則が次々と人々の前に明らかにされた。ポーランドの天文学者コペルニクスの「地動説」、ガリレイによる「力学の原理」の発見、ドイツの天文学者ケプラーの「惑星の軌道に関する法則」の樹立、イギリスの科学者ニュートンによる「光りの分解；万有引力；微積分法」等、こうした科学の学問の成果は、以後の科学の発展に大きな影響を及ぼすことになる。

この時代の学問の発展に指導的役割を果たした人物として、さらに二人の哲学者フランスのデカルトと、イギリスのフランシス・ベーコンの名前を逸することはできない。デカルトの功績は哲学、自然科学の双方の分野に及ぶ。有名な「われ思う故にわれ在り」^{コギト エルゴ スム} (Cogito, ergo sum) の命題にしたがって、デカルトはその代表的著作『方法叙説』(1637)、『哲学原理』(1644)等において、懷疑を出発点とした論理性、実証性に基づく真の学問確立の可能性を探究した。F. ベイコンはアリストテレスの形式論理学書『オルガヌ

ム』に対して、『ノーヴム・オルガヌム』*Novum Organum* (1620) を著わし、哲学・学問の任務は科学的な発明、発見によって人間に自然を克服する力を与えることであり、演繹よりもむしろ実験に基づいた個々の事例の比較や吟味から、自然の一般法則・知識を探究すべきだと主張して科学的帰納法を提唱し、経験論的哲学の創始者とされている。彼の思想はその最も有名な言葉のうちに集約されている。「知は力なり。」

2) 諸学の形成と「科学」の独立

16～17世紀が敷いた実証的、科学的学問の姿勢・方法論は、それ以後の学問のあり方、方向を明確に決定づけることになった。人間の理性に照らして真理を求める科学的精神は、自然のみならず人文・社会の領域にも及び、やがては人文科学(cultural science)、社会科学(social science)といった分野の諸学を成立させることになった。

イギリスの哲学者ホッブスは、哲学から神学を峻別した機械論的自然主義に立ち、またロックは認識における経験論の立場から、人間・社会・国家の問題を論じた。フランスの法理学者モンテスキューは、デカルトの方法論等に依りながら『法の精神』(1748)等を著わし、「法学」の基礎を敷いた。またイギリスの経済学者アダム・スミスは主著『国富論』(1776)により、理論・政策・歴史を統一、不可分なものとして論じ、最初の体系的「経済学」を確立した。こうした学問の流れをさらに加速させたのは「啓蒙思想」の運動である。ドイツの哲学者カントに従えば「啓蒙^{アウフ}(Auf-^{クレール}klärung)とは、人間が自らの怠惰と怯懦から招いた精神的未成年状態からの悟性による脱却⁽⁵⁾」と定義される。ヴォルテール、ディドロ

らをはじめとする思想家達は、自らの哲学を合理的科学精神に基づいた「光の哲学」(philosophiae de la lumiere) フィロソフィード ラリュミエールと呼び、理性の光により無知、迷妄、困習、旧弊の闇を啓くことを主張して、積極的に啓蒙運動を展開、その後の学問の方向を決定づけた。

学問に関して、啓蒙思想家の中で特にルソーについてふれておく必要がある。かれは自らを放浪、貧困、無名の境涯から一躍有名にした、わずか30頁程の論文「学問芸術論」において次のように述べている。

学問、文学、芸術は……人間を縛っている鉄鎖を花環でかざり、人生の目的と思われる人間の生まれながらの自由の感情をおしこらし、人間に隷属状態を好ませ、いわゆる文化人を作りあげた。……われわれの学問、芸術が完全なものへと進歩するにつれ、われわれの魂は腐敗したのである。……学問と芸術の光明がわれわれの地平にのぼるにつれ、徳は消え失せたのであり、同じ現象はあらゆる時代とあらゆる場所に見出される。⁽⁶⁾

学問に対するルソーの激しい攻撃は、主として奢侈と無為のうちにある上流階級とそれに寄生する者達の習俗、道徳に向けられたものであったが、それは既成の文明、社会、制度批判という点において、他の啓蒙思想家の運動と軌を一にするものであり、やがてその思想はフランス革命の知的温床を提供することとなった。

ともかくもこうして「理性の光」を合言葉とする啓蒙主義運動に結実した科学的、実証的学問の潮流は、さらには19～20世紀の学問の方向を決定づけることになった。この間特

筆すべきは、19世紀の著しい自然科学の発達によって、学問・哲学から科学が分離してきたということであろう。この時期、以前は学問・知の総体を意味し、philosophyの一部であった science は、優先的に「科学」の意味で使用されるようになり、ここに学問は二つの文化—文科と理科とに分離されることになったのである。

6. 中国における学問

1) 「学問」の語源

漢字の「学」は、古くは「學」、または「斆」であった。「學」の成立については、「𠂔」の部分の解釈について諸説を異にするが、いずれにもせよ「両手(𠂔)+屋根(宀)+子」の組み合わせだった文字として、「子供が手振り身振りで物事を習う場所」がその原義であり、そこから「行為としての學」が派生したものと推測されている。魏の字書『廣雅』には「學は官(学舎の意)なり」とも、「學は識るなり」、「學は效ふなり」とも記されている。

「斆」は「學」に「支(攴)」(小木；小木、ムチのようなもので打つ)を加えた形で、やがて「斆」→「斆」→「教」と「學」から分離した「教える」という意味の言葉に独立していった。したがって、「學」と「教」とは同系の語と考えられている。また『廣雅』には「學は教ふるなり」とも記されている。英語の learn の項、ドイツ語の lernen、lehren 例にも見たように、ここでも「学ぶ」と「教える」とが同じ言葉から生れたとされているのは、興味深い事実である。

「問」は「戸」が2枚向き合った「門」に「口」が加わったもので「門、玄関などに立って、話かける；問いかける；訊ねる」が、

その原義とされる。ついでながら「聞」も「問」と同形の言葉で「門のところで問いかけて、相手の答えを聞く」によっている。また「学」に近い意味で「学習」「習得」などに使用されている「習う」について、これにも異説があるが、『説文』には「数(しばしば)飛ぶなり」と説明されている。「鳥が何回も羽ばたいて飛ぶ練習をする」ことに由来すると考えられる。

2) パラダイムとしての儒学の形成

中国における学問の伝統は古い。孔子の有名な『論語』における「学びて時にこれを習う、また説ばしからずや(学而)」、「吾れ十有五にして学に志す(為政)」といった言葉にも、またたとえば『孟子』の「学問の道は他になし、その放心を求むるのみ(告子)」といった一文にも、執拗に「学」の追求が語られている。これらはごく数例であるが、我々はこれにさらに時を下った宋代、朱子の作とされる有名な詩の一節を加えることもできる。「少年老い易く学成り難し、一寸の光陰軽んずべからず」(偶成)。

このようにして追求された中国における学問の本流は儒学であった。儒学の始祖たちにとっての学問の目的とは、学んで最高の人格を備えた聖人の域に至ることであり、現実的には、学問によって己を修め、仁と徳とを備えた君子による理想の国家を実現することであった。こうした目的から、その学問の内容は、人の道と政治のあり方を中心とした著しく倫理的、政治的性格の強いものであったとすることができる。

しかし孔子を祖とする「儒学」も、その創始の段階にあっては「学」というよりは「道」「教え」に近いものであった、というのが正確であろう。孔子の教えが「儒学」として確

立していったのは、むしろ孔子、孟子以後のことと言っていい。秦の始皇帝の焚書抗儒の後、漢の時代の学者たちの仕事は儒教の經典の整理復元と字句の解釈を中心とした一種の文献学、「訓詁の学」であった。訓詁の学はその後、魏晉南北朝、隋唐宋におよんで儒学のパラダイムを形成することとなった。君臣関係を軸にした秩序ある国家の建設という儒の理想は、歴代の為政者たちの政治目的に合致し、儒学は前漢において官学とされ、中央集権的官僚体制の確立を加速することになった。隋の時代には科挙の登用試験と教育制度とが儒教を軸に体系化された。中国にも荘子、墨子の学、その他天文学、数学、医学等も無くはなかったが、それらはこうした状況の中で傍系に押しやられるか、逐次衰退するかして、結果儒の学問的伝統が堅固に築かれることとなったのである。

過去の經典、文献、字句、主として四書五經の解釈とその暗記により、因習と伝統を守ろうとするこうした学問としての儒学のあり方は、ギリシャの学問・科学の伝統に基づく西洋の論理的、実証的学問との対比において、ある意味でその後の中国の学問の方向を運命的に規定することになったと言える。西洋と東洋の学問のこうした質的差異性について、たとえば中山茂氏はつぎのように記している。

ヘレニズムや漢代に諸学の構成のパターンがすでに固まったといえる。西洋では、数学諸科(天文学や静力学も含む)、弁論術、哲学、医学が標準的な学問であり……中国では儒教教典の研究、すなわち經学が最高の地位にあり、天文暦学は補助的位置にあり、医学やさらに数学となるとずっと地位が低くなる。……さら

にこれらの学問構造の底に流れるものとして、西洋の学統では論争的学問（弁論、論理）が主流であるのに対し、中国では史書や儒教教典のような因習伝統の遵奉を旨とする記録的学問が主流であることに気づく。⁽⁷⁾

中国におけるこうした学問の流れは、日本の近世に至るまでの学問の歴史に決して無関係ではない。

7. 日本における学問

1) 「まねぶ」の伝統

学問に関して日本には古来「まなぶ」という言葉がある。異説もあるが「まなぶ」は本来「まねをする」の「まね（真似）」に関係し、これに「ぶ」が加わった動詞「まねぶ」の転化したものだとされている。この「まなぶ」と「まねぶ」とは、長い間その使用を区別せず、言葉を変えれば自由に使われてきた。たとえば「驥をまなぶは驥のたぐひ、舜をまなぶは舜の徒なり」（『徒然草』—85段）は、「まなぶ」が「まねをする」の意味で使用された一例である。逆に「殿上の若き人々もこの事（＝絵をかくこと）まねぶをば……」（『源氏物語』—絵合）は、「まねぶ」が「まなぶ」の意で使用された例と言えよう。勿論「まなぶ」を「学ぶ」、「まねぶ」を「真似をする」という、我々が一般に了解している本来の意味での用例も多く認められる。

いずれにもせよ「まなぶ」と「まねぶ」とがこうして未分化に使用されてきた背景には、あえて両者を分ける必要を感じず「まなぶ」とは「まねぶ（る）」ことだとする日本人の意識が働いていたものと推測される。この場合

「まねび、まなぶ」とは単に字句に限らず、学問と技芸——学芸一般に対して適用された言葉であった。世阿弥が能楽の聖典とされる『風姿花伝』において「まねび」をひとつの芸術理論として体系化したのは、有名なところである。能に限らず書道、茶道、剣道、その他において「まねび」を「まなび」とする思想は、日本の学芸の伝統の中に深くその根をおろしている。「まなぶ」と「まねぶ」とが区別して使用されるようになったのは鎌倉時代以後のこととされている。

2) 「学問」と「学文」

日本における「学問」ということばの歴史も古い。学問は古くは、今日一般に言う広義の学問・研究というよりは、主として漢籍、仏典、和歌などを学ぶことをさし、武芸に対置される貴族・知識階級の教養のひとつであった。たとえば『源氏物語』—「帚木」には、「（頭中将）夜昼、学問をも遊びをも、もろともにして、をさをさたち後れず」といった一文があるが、ここでは「学問」は「漢学」、「遊び」は「管弦」の意味だと解されている。また『徒然草』における次の一文、「ある者、子を法師になしてく学問して因果の理をも知り……」（第188段）における「学問」は、明らかに「仏典の学問」の意味での使用の一例である。

こうして主として学問が漢籍、仏典等を学び、その文を解釈・暗記することを意味したことから、中世から近世にかけては「学問」は「学文」と書かれることも多かった。たとえば鎌倉時代、親鸞門弟の編集になる『歎異抄』には、版によっても異なるが「学問」と「学文」との併用の例が認められるものもある。「學文して、人の謗りを止め……。學問せ

ば、いよいよ如来の御本意をしり……。徳川家康が幕府を開いた慶長8年、1603年に長崎で印刷された『日葡辞書』には、次のように載っている。「Gacumon 学文、文ヲ学ブ」。

3) 知識=知人；高僧

学問に係る語として「知識（智識）」がある。ヘボン『和英語林集成』には「知識」の説明としてまず A learned priest(高僧)、次いで knowledge が記されている。その順序からも推測可能なように、日本の古語においては「知識」は今日我々が理解する意味の知識というよりは、仏教語のニュアンスの強い言葉であった。

「知識」の本来の意味は「知り合い、知人；学問のある高僧」の意であるが、その原義はサンスクリット語の mitra^{ミトラ}「友人；親友」に由来するといわれている。漢語の「知識」は mitra の仏教語としての意味を吸収して、本来の「知；知の内容」の他に、特に「自己の仏道修行を助けてくれる知人；ともに修行をする友人、仲間；修行を導く高僧」といった意味を発展させた。特に「師として修行者を指導する高僧」を「善知識」とも呼んでいた。

日本における「知識」がまた近世に至るまで「仏道を機縁とする知友、仲間、集団；これを導く高僧」といった仏教語の色彩を帯びていたのはこうした理由によっている。時に「知識」は「知識の物」などの表現で「仏に結縁するための寄付；寺などへの寄進」を意味することもあった。「高僧」の例としては「滝口入道をも善知識のために具せられけり」（『平家物語』）。また次は「寄進・喜捨」の一例である。「一人の聖人ありて……普く諸の人を催て、知識と伝ふ事をもって其の橋を渡してけり。」（『今昔物語』）。「知識」が漢語の本

来の語義に従って今日我々が了解しているような意味において使用されるようになったのは、主として江戸末期から明治に至ってからのこととされる。たとえば、「智識ヲ世界ニ求メ、大ニ皇基ヲ振起スヘシ。」（「五箇条の御誓文」）。

4) 「学問」の流れ——古代～中世～近世

兼好法師は『徒然草』第一段において次のように述べている。「ありたきことは、まことしき文の道、作文、和歌、管絃の道、また有職に公事の方……。ここで「まことしき文の道」とは「本格的学問、主として儒学」、「作文」は「漢詩・漢文を作ること」、「有職」は「朝廷・貴族（後に武家）における官職・儀式・礼法に関する伝統的知識」を意味している。一文は兼好が望ましい学問技芸の具体的内容について述べたものだが、これに仏教的知識を加えれば、ほぼ日本の古代より近世に至る教養・知識・学問の体系が示されたことになる。

仏教と儒教とは6世紀ほぼ時を同じくして日本にもたらされた。仏教は飛鳥より奈良の護国仏教、平安の天台・真言の密教、鎌倉の真宗・日蓮宗・禅宗その他の新興宗教へと刷新を繰り返し、日本の近世に至る文化・学問の歴史に一大潮流を形成した。また儒学・漢学は有職故実の他に、和歌・日本の古典などととともに、貴族の修めべき教養・学問「和漢の才・学」として重視され、日本の学問的教養の基礎となった。そしてこうした古代より中世にかけての学問の歴史における特色は、それが長期にわたりほぼ独占的に貴族と僧侶という知的特権階級の手の中にあったということであろう。

鎌倉時代に至って、学問の歴史には新たな

動きが加わった。その第一は学問の世界への武士の参入である。中世の代表的図書館とされる金沢文庫の創立(1259)、また足利学校の再興(1439)などに象徴されるように、武士は政権への台頭とともにまた学問の世界にも地歩を築き始めた。もうひとつ特筆すべきは、いわゆる五山文学の学問への貢献である。南北朝から室町時代にかけて、京都五山を中心とする禅僧たちは仏教のみならず、おりから伝わった朱子学を中心とする儒学、漢詩文、歴史等の学問研究に励み、また種々の出版事業を行なって、学問・文化の伝播拡大に寄与した。こうした流れの中で中世も後期になると特権階級に限られていた学問は、武士から都市の富裕な町民へ、中央から地方へと下向し、庶民の間に拡大してゆくこととなった。学問に興味ある者の子弟の学問・教育のために寺子屋などが開かれるようになったのもこの頃のことである。こうして徐々に幕藩体制下における学問的状况が準備されつつあったといっている。

江戸時代の学問の主流は儒学であった。儒教の「修身齐家治国平天下」を理想とする政治哲学は幕藩体制の安定に寄与するものと考えられ、特に五山文学の歴史の中から生れた林羅山による林家の朱子学は官学として保護奨励された。一方同じ儒学ながらも中江藤樹、熊沢蕃山等は朱子学の観念性を批判して陽明学こそが学問であると主張し、また伊藤仁斎、荻生徂徠等は孔子・孟子の原典に帰って学ぶべきことを唱えて古学派といわれる学派を打ち立てた。さらに江戸時代大きく発展を遂げた学問として、国学の名をあげなければならぬ。契中、賀茂真淵、本居宣長等は、儒教・仏教等の伝統から学問を切り離して、日本古来の古道・古典の精密な研究を旨とする文献

学としての国学を確立した。たとえば本居宣長は『うひ山ふみ』において、学問としての国学の理想を次のように説いている。

一人の生涯の力を以ては、ことごとくは、其奥までは究めがたきわざなれば、其中に主としてよところを定めて、かならずその奥をきはめつくさんと、はじめより志を高く大にたてゝ、つとめ學ぶべき也。……さてその主としてよべきすじは、何れぞといへば、道（国学）の學問なり。⁽⁸⁾

儒学、国学、その他諸学とを問わず、江戸時代においては広く学問が奨励され、数多くの藩校、寺子屋、私塾などにおいて行なわれたこの学問・教育が、やがては明治以後の日本の近代国家形成の基礎となった。昨今、日本の近代国家としての成功の鍵を、江戸時代の教育水準の高さに求める声も多い。ただしこうした学問への国民的熱意や学問的水準とは別に、その内容・性格に関して言えば、古代より江戸末期に至るまでの日本の学問は、西洋の実証的・科学的学問に比較して、中国の学問的伝統に則した古典、經典の文献学的解釈、訓古の学を中心とする極めて倫理的、観念的特性の強いものであったことは注目に値する。

5) 新たな学問の展開

江戸末期から明治に至って日本の学問は、未曾有の変化を経験することになる。新たな波は西欧よりの学問であった。この新しい学問の波は実証的、科学的思考と方法論とをもって、日本における従来からの經典、古典の訓古・解釈を中心とする倫理的、人文的色彩

の強い学問のあり方に革命的变化を求めるものであった。

江戸末期最初の波は蘭学という形でやってきた。鎖国体制の中でわずかに長崎のオランダ人を通じてもたらされた医学・自然科学を中心とする西洋の学問は、幕末の知識人に大きな影響を与え、しいては幕府封建体制の崩壊を加速する力ともなった。

明治に至っては近代国家形成の必要から、蘭学のみならず米英独仏その他西洋諸国の学問・文化が積極的に取入れられた。この西洋の学問は洋学の名で知られ、その内容は実学であった。福沢諭吉はその有名な著作『学問ノススメ』において、「学問の要は活用に在るのみ。活用なき学問は無学に等し」として「されば今斯る実なき学問（＝古来の和漢の学）は先ず次にし、専ら勤むべきは人間普通日用に近き実学（＝洋学）なり」と述べている。⁽⁹⁾ 福沢は「実学」の語にしばしばサイエンスの振り仮名を付しているが、この実学をもって個人の自立と文明国家としての独立をはかるべきだとする『学問ノススメ』17編は、一説には海賊版を含め各編約20万部、計340万部を売ったとさえ言われ、当時の新しい学問に対する国民的関心のほどが想像される。

明治知識人にとっての課題は、和漢の伝統的学問とこうした新しい西洋の学問とをいかに接合させるかということであった。学問が過去との完全な断絶においてありえない以上、旧来の言葉・観念をどう読みかえて新しい知識・思想に対し、それを受け入れるかは緊急の課題であった。そこには果敢に知の組み替えに取り組み、新しい学問体系の確立にかけた明治知識人の想像を絶する努力があったのであり、今日我々が自明のものとしている学問・知識の体系とその成果は、こうした先人

たちの貢献に多くを負っている。

8. 学問の現在

以上東西における「学問」のコンセプトの歴史を概観してきた。その過程で明らかになった西の実証的、科学的に対する東の倫理的、人文的といった学問の性格の相違のよってきたるゆえんについては、また稿をあらためる必要がある。ここで確認しておかなければならないのは、学問は洋の東西、その性格如何を問わず、いかようにも過去と断絶してはありえず、過去の蓄積に立ちながら、長い歴史の過程において形成されてきた大きな流れだということである。その『自伝ノート』においてアインシュタインが次のように述べた時、彼は、過去の学問の成果と人間の創造的精神との出会いによる、新たな学問の創造のメカニズムをわれわれに明かしている。

ニュートン先生、お許してください。あなたは、あなたの時代に、最も高い思考力と創造力の人として可能な唯一の道を発見されました。あなたが創造された概念は現在でさえも依然としてわれわれの物理的思考を導いています。ただわれわれは、現在事物の間の諸関連をより深く把握しようとするなら、あなたの概念を直接的経験の枠内からもっとかけはなれたものに置き換えなければならないことを知っているだけのことです。⁽¹⁰⁾

かくして「学問」は過去の成果にもとづいた、人間精神の創造的営みの歴史として今日に伝えられているのであるが、では現在の学問について、その状況はいかようであり、ま

たどのような問題が指摘されているのであろうか。

そうした学問の現在が直面するいくつかの主要な問題としては、(1) 学問の細分化・専門化、(2) 実利的、功利的傾向を強める学問への批判、(3) 有り余る自由と大衆文化の中における真の学問的気概の衰弱とその方向喪失、等があげられる。

第一の問題に関しては、複雑・多様な現実世界を反映して学問がますますその専門性を強め、細分化してゆくことが不可避にしても、学問に携わる者にとってはたえず全体的視野に立ち返り、個々の分野の学問的意義を総合的に問い直す努力が求められることになる。

第二の問題は、功利・利害に傾斜する今日の時代精神を強く反映している。実効・実利を目的として、あまりにも性急に学問的成果を求めることは、学問を浅薄皮相なものとし、結果としてその衰退を導くことにもなりかねない。この点に関しては、「人間の幸福」と「真理の探究」という学問の本来的目的を想起し、たえずその哲学的、倫理的意義を心に掛けることが肝要といえるであろう。

第三の問題は第一、第二の問題と全く関係なしとはしないが、すでに第一章における西部氏の指摘にみたように極めて深刻な様相を呈している。見方によれば、有り余る自由、はびこる相対主義、物質優先の大衆消費文化、民主・平等の名のもとにおける管理社会、氾濫する情報といった状況の中において、今日真の学問的気概は失われ、知的エロス、学問的知性は方向を喪失し、衰弱の危機に瀕しているかのごとき状況がある。確かに横行・跋扈する安易で安上がりな既成・匿名の知識の海の中にあてどもなく浮遊し、人々は自ら考え、学び、学問する精神の自由を喪失しさっ

たかにも見える。

外的に保証された自由もさることながら、学問はなによりもまず人間の精神の自由とそありように深く係っている。今日までの学問の発展を支えたものが、この人間の自由な精神であったとすれば、我々は人間精神の自由の復権にこそ今日の学問が抱える諸問題の打開と、学問の未来とを託すことになる。田中美知太郎はその『学問論』において、学問は常に危い橋を渡って来た、としたうえで次のように述べている。「学問するということは、ますます困難になって行くとも思えるが、しかし学問はわれわれを通してしか存在し得ないのである。学問知識はそれ自体では存在しないのであって、われわれによって担われ、われわれによって生きられなければならない。」⁽¹¹⁾

[注]

- (1) 西部邁『新学問論』(講談社, 1989) p.13.
- (2) 『形而上学』アリストテレス全集第12巻(岩波書店, 1977) p.3.
- (3) トマス・アクィナス『神学大全』(創文社, 1967) p.5.
- (4) ガリレオ『偽金鑑識官』世界の名著第21巻(中央公論社, 1973) p.308.
- (5) カント『啓蒙とは何か』(岩波書店, 1988) p.7.
- (6) ルソー『学問芸術論』ルソー全集第14巻(白水社, 1978) pp.16~19.
- (7) 中山茂『歴史としての学問』(中央公論社, 1987) pp.71~72.
- (8) 本居宣長『うひ山ふみ』(岩波書店, 1975) pp.16~17.
- (9) 福沢諭吉『学問ノススメ』福沢諭吉全集第3巻(岩波書店, 1969) p.30.
- (10) アインシュタイン『自伝ノート』(東京図書, 1979) p.36.
- (11) 田中美知太郎『学問論』(筑摩書房, 1987) p.432.